

東方佛教の本質及傳統

文學博士 鷺尾順敬

西洋では夙に南方佛教、北方佛教の稱があつて、南方佛教とはチャム、セイロン等に行はれてる佛教をいひ、之に對して北方佛教とは曾て中央アジアの月氏國から天山南路又は北路を経て東漸し、更に又南折して支那に入つた佛教を云ふことに成つてゐる。これは主として地理的の區分であるが、其の他歴史も違ひ、又教義などに於ても相異つてゐるのである。佛教史の上で見ると、南方佛教はアシヨカ王の事業から、北方佛教はカニシカ王の事業から起つてゐるが、支那に入つて漢譯大藏經を生んだのは其の北方佛教で、更に又其の漢譯藏經を中心としてゐるのが我が日本の佛教である。だから日本佛教は其の系統から云ふと正に北方佛教に屬すべきものであるが、しかも仔細に注意して研究してみると、支那の佛教、朝鮮の佛教、日本の佛教はそれ／＼別なものであつて、日本は日本で、傳來後千三百五十有餘年の間に特異な徑路を経て特異な發達を遂げてゐるのである。私は色々研究の結果此の點に氣がついて、

南北兩佛教の外に東方佛教を認めんとするものであるが、此の私の所謂る東方佛教の特徴はまだ西洋人に知られてゐないばかりでなく、支那は勿論、日本の佛教界にすら充分には理解されてゐないのである。

最近東亞佛教大會が開催されたのを機會に、支那僧が二十名程我が國に渡來して、全国各地の寺院を見て廻つたが、其の結果彼等の一部は、從來見くびつてゐた日本の佛教が思ひも寄らぬ特異な發達を遂げてゐるのを見て、これこそ釋迦牟尼の大精神は成されるのであると感歎し、どうして茲に到つたかについて日本僧に質問したが、肝腎の日本僧に其の知識がなかつたゝめ、充分の説明を與へることができず、彼等は空しく疑問を懷いて歸國したといふことである。

それでは私の所謂る東方佛教とはどんなものであるか、どういふ所に其の特徴があるのか、順序として説明せばならぬが、進んで今之を明らかにする爲には先づ支那に於ける佛教の發達史から見てかゝらねばならぬ。凡そ佛教は三藏と云つて經、律、論の三部から成立つてゐる。經藏は例へば法華、華嚴等の如きもので、大きな理想、哲理をうたつた詩歌的のものであり、律は文字の如く戒律で比丘は二百五十戒、比丘尼は五百戒といふ風の事を定めた條目的、記載的のもの、論は非常に辨證的なもので、論理に訴へて色々の哲理を知識的に取扱つたものである。ところで日本佛教は以上三つの種別の何れに屬す

るものであるかといふと、最初に佛教が支那へ入つた時には、雜然として色々のものが入つて來たのを支那ではそれを皆翻譯して研究した。ところが研究するに隨つて甲の經典と乙の經典と彼此互に相容れないものがあることを段々と發見したので、次には批判的の態度に移つて教理上の内容を檢討し、哲學的の解釋をすることになつた。それが所謂教相判釋で、其の立場は全く論の立場である。

支那で大乘佛教の教理が成立つたのは、實に此の論理的研究が六朝末に盛を致した爲であつて、戒律を守るといふ事よりも教理の根柢を攫まうとする所に其の教の大きな特色があつた。つまり大乘教では小乘教が戒相戒體を條目に置いたのに反して、戒體は精神にありとしたのである。そして假令戒相が立つても戒體が調はねば破戒であるとし、反對に又、相が崩れても精神に體があれば持戒であるとしたのである。

斯ういふ風な論の佛教が支那に興つて揚子江の沿岸に新文化の華を開いてゐた六朝時代は、恰も我が國の飛鳥時代に當るのであつて、此時北方の蠻族から壓せられて南移して來た漢族の文化は、驚くべき勢で我國に流れ込み、聖徳太子といふ大人物の手に受入れられて、こゝに六朝の佛教を基礎とした自由自在な日本佛教の花が開くことゝなつたのである。勝鬘、維摩、法華の三經を講義した有名な三教義疏が太子の手に成つたのは此の時代の事であつて、此の書は紀記よりも百年程早く出來てゐるから、眞に

日本人の最初の著述といふべきであるが、それを見ると太子の苦心研究の蹟が明かに看取される。即ち太子は只漠然と受入れられたのでなく、充分に之を研究し理解されたのであつて、其の證據には、守屋の亡滅後、其の財産一切を官没して鎮護國家の道場たる四天王寺を建立し、或は又悲田院、福田院、施藥院等の社會事業をせられてゐる。これは非常に進んだやり方であつて、太子が推古天皇に貧民救濟を説いてゐる勝鬘經を進講せられてゐる事から觀て、太子がそれらの經典を充分に心讀されてゐた事が分るのである。奈良朝の驚くべき文化は斯くして生れたのであつて、その基調は實に自由自在の佛教の哲理にある。私は之を以て東方佛教の本質的傳統と見るのである。

即ち東方佛教とは、教義や條目に拘泥せず、社會的、普遍的國家的に行く性質を持つてゐる六朝時代の自由自在な大乘佛教が、日本人の手にわたつて自由自在に發達したものである。

斯ういふ自由自在の宗教であるから、一つ間違へば墮落もするし、國家の害毒にもなるが、しかし立派な人の手にかゝれば自由自在に發達する。精神教の長所は其處に存するのである。例へばあの僧兵であるが、戒律の上からいふと苟くも僧侶が兵器を持つのは怪しからぬ破戒の行爲であるけれども、精神的にいふと佛への供養の物を横奪に来る者があつた場合にそれを兵器で防ぐのは破戒でも何でもないといふ理窟も立つ。歴史の上で見ると僧兵は中々強いが、僧兵の強さは其の形式作法を破つた所にある。

文永の役には我が兵が戦場の作法を守つて野蠻人の前に一々名乗をしてゐたからバタバタと將基倒しに死んだのであるが、僧兵の方は反對に戦場の作法にも武士の作法にも拘らないから盛に勝つたのである。武士の間では長刀を使ふのは卑怯であるとしたが、僧兵は構はず何でも使つた。根來の僧兵などは飛道具まで使つて敵を惱ました。そこに自由自在な處がある。斯ういふ風に根本は精神で、作法ではないといふ六朝時代の哲學から發達したのが日本の佛教であつて、我國では佛教者に肉食妻帯が許されてゐるのも精神さへチャンとしてゐれば形はどうでもいふ所から出立してゐる。斯ういふと破戒も持戒も一緒になるが、そこに日本佛教即東方佛教の大きな所、面白い所が存する。ところが支那では、あとから段々と密教が入る、俱舍、法相が入るといふ風でガンジ絡みの研究が起つて縦横無盡な論の思想と接觸して、別な方に形を變へた。これが支那の佛教と日本の佛教との違ふ所である。

日本の道德思想に自由自在な處のあるのは實に之がためであつて、神佛の兩思想が全く圓融無碍に交錯してゐる。だから日本の神佛は一つで決して二つではない。之を維新の時には二つに引裂いたから誤つたのであつて、成る程徳川時代の佛教には弊害があつたが、これは徳川幕府の政策として從來の自由自在な佛教を束縛したのが原因で墮落したのである。江戸時代の佛教のみを見て日本佛教を批判する事はできない。眞の日本佛教の價値を見ようと思ふなら、もつと古い所から觀察せねばならぬ。(講口生手記)